観光文化

Tourism & Culture

VOL. 188
2008 March
財団法人日本交通公社

特集◎ 足尾銅山 ― その歴史に学び保存活用を期する

◆巻頭言
足尾の紅葉　立松和平……①

◆特集
- 足尾銅山、世界遺産登録への道　永井　護……②
- 足尾銅山と近代技術　鈴木　淳……⑥
- 自分史の中の足尾銅山　小野崎　敏……⑩
- 足尾銅山緑化の歩み ― 取り組みの歴史、現状と展望　神山英昭……⑭

◆視点
- ブータンに学ぶ観光開発の哲学
  ―ＧＮＨとツーリズムの関係性についての一考察　山村高淑……⑱

◆連載
Ⅰ　あの町この町　第26回
大漁満足 ― 鳥取県・琴浦町　池内　紀……㉒
Ⅱ　明治のジャパノロジスト F. ブリンクリーの「美しい国ニッポン」⑤
英国に認めさせた初の国際結婚　沢木泰昭……㉘
Ⅲ　ホスピタリティの手触り 47
成熟の国へ　山口由美……㉚

◆新着図書紹介……㉜

――旧中山道・笠取峠の石仏――

中山道は江戸日本橋を出立（しゅったつ）し関東平野を北西に進むと、最初の難所、碓水峠に至る。その峠を越えると信濃路が続く。噴煙のたなびく浅間山を眺め木曽谷へとたどるわけだが、その道中の芦田宿から長窪宿へと延びる途中に笠取峠がある。芦田宿の西方一キロ地点から標高八八七メートルの峠にかけて、樹齢二百年から三百年を超える松並木が約二キロにわたり見事な景観を往時のまま今に伝えている。峠の入り口に、今回お伝えする石仏がひっそりとたたずみ旅人の安全を見守るかのような風情が実に心地よく感じられた。

私はこの旧道をカメラをかついで歩いてみたが、途中で誰一人会う人もなかった。だが、江戸期には多くの旅人でにぎわったことであろう。地元（立科町）の人に聞くと、幕府の命で植樹が始められたのは一六〇二年（慶長七年）ころからで、現在、長野県の天然記念物に指定されている。旧中山道の周辺に点在する家並みとともに末永く保護されてほしい。

（写真・文　樋口健二）

足尾の紅葉

作家　立松　和平

昨年もいろいろなことに感動したものだが、その一つに私たちが十三年前に足尾に植林した樹木が森になり、見事に紅葉していたということがある。周りの山が銅山製錬所の出す煙のため煙害を起こし、ほとんど枯れた。赤茶けた風景の中に、紅葉の鮮やかな赤や黄があるものだから、一段と目立つ。

私は「足尾に緑を育てる会」の神山英昭会長と一緒に植林地を歩き、その見事な色づき具合に、幾分感傷的にもなった。神山さんは足尾に在住しているので知っているにせよ、植林とは関係のない秋も深まったころなので、この季節に私は植林地を歩いたことがこれまでなかったのである。

樹は大きいのは七メートルほどに育っていて、多種多様の樹種があるせいで、完全に森となっている。植林をした時には仕方がないのだが、樹木の間隔が近すぎ、間伐をしなければならないほどである。ほとんどが広葉樹なので間伐にそれほど神経質になることはないにせよ、やがて多少は樹を切り払って整理しなければならないだろう。

「植林活動はうまくいったということだね」

「ここまでうまくいくとは思わなかったね」

神山さんと私はこんな会話を交わした。神山さんとは三十年来の友である。約十三年前に神山さんたち古い仲間と「足尾に緑を育てる会」をつくって植樹を始めたのは、足尾鉱毒に対する本格的な反対運動を行うため国会議員を辞し、民衆の中に入っていった田中正造（一八四一～一九一三）の影響であった。田中正造は帝国議会で何度も質問に立ち、治山治水を訴えた。水源域を荒廃させないことが、山を治め川を治め、民を安穏にすることだと説いたのである。その田中正造がやり残してきたこととして、私たちは水源域の復活すなわち治山治水をするため、草木はすべて枯れ表土さえも失われた山に樹を植えることを始めたのだ。

苗と土とを山の傾面に担ぎ上げ、ガレ場をスコップやツルハシで掘る。土を入れ、苗を入れる。それは植木鉢に植えることと一緒で、樹はすぐに枯れるだろうと忠告してくれる人も多かったが、樹自身が持つ生命力が勝り、こうして見事な森になっていったのである。

十三年はあっという間だが、最初の年に植えにきた七歳の小学一年生が、二十歳の青年になる歳月なのだ。実際に毎年植林にきてくれる家族がいて、子供の成長に目を見張る。

（たてまつ　わへい）

足尾銅山
――その歴史に学び保存活用を期する

栃木県足尾町（現・日光市）は日本の近代産業化を担った銅山の町。この地域では現在、閉山（一九七三年）以来手つかずに残る歴史的資源を産業遺産として保存・活用していく地域振興策や世界遺産の登録に向け動き始めている。今号では、足尾銅山の歴史、環境、産業遺産などの保全の意義について考え、地域振興に向けたさまざまな取り組みを紹介する。

特集 1

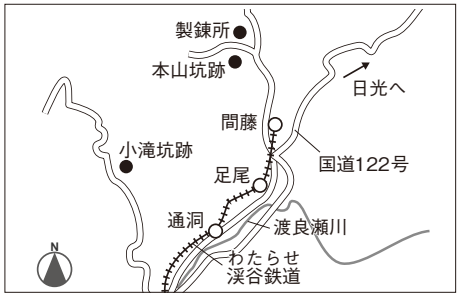
足尾銅山、世界遺産登録への道

宇都宮大学　工学部教授
永井　護

足尾町を含む二市二町一村が合併した新しい日光市は、二〇〇七年九月に世界遺産暫定一覧追加記載提案書を文化庁に提出した。以下では、検討委員会の委員としてその作成に参加して感じた点を列記する。

日本の産業化・近代化を振り返る題材としての足尾銅山

古典的な歴史的文化遺産と異なり、近代の産業遺産を語る場合、二つの相違点がある。古典的な文化遺産は多くの場合、その社会の繁栄を表すものであり、余剰の蓄積としてその文化の特長を表現している。近代の産業遺産は、富を造るための装置であり、従来の文化財に関する評価とは異なる視点が求められる。すぐ隣にある世界遺産、日光山内の社寺とは同じ基準で比べられないことは誰しも理解できる。つまり、評価に際し、物としての遺産自体というよりは物と歴史的出来事との関係に、より重点が置かれるべきであると思われる。次に、我々自身が近代を経験し、それを経て現在の生活があり、さらに次に歩むべき方向を模索している状態にある。すなわち、近代遺産の評価は、我々が次にとるべき方向と密接に関係している。



我々のとるべき方向が不確実であればそれだけ過去の評価が大切であり、同時に難しくなる。しかし、多くの歴史が教えるところによると、次の時代を担うパラダイムの要素は、既に前時代のどこかに潜んでいる場合が多い。このように考えると、近代の産業遺産を評価する視点として、祖父母や親などを含め、我々の過去の体験と記憶の証しとしての価値、我々の次の行動を決める際の目印としての価値といったものが、大切なよりどころとなるように思われる。

通洞選鉱場から見た町並み　手前にシックナーが見える

文献や著作を含め、足尾の産業遺産は日本の産業化と近代化を振り返るために、見通しの良い視点場と豊富な題材を提供する貴重な遺産であると言える。しかし、栃木県史は付属資料として足尾編を持つが、本編に足尾の記述はほとんど見当たらない。また、旧足尾町も町史を持っていない。そのようななかで、最も一般的な見方は、社会科の教科書の中でも紹介される〝公害の原点〟に代表されるとらえ方であろう。恐らく公害問題が噴出した昭和三十年代に定着したとらえ方であると思われる。先の提案書のテーマは、〝日本の近代化・産業化と公害対策の起点〟である。足尾の歴史は、〝光と影〟の両面から日本の産業化の先端となる出来事をつづりながら、日本のみならず世界の産銅技術にも大きな貢献をしたということである。

幸いにも、近年、足尾には多くの人々が関心を持ち始めている。しかも、その関心は多様であり、互いに矛盾する側面も有する。しかし、多様性があることが現在に生きる遺産であり、貴重であるとも言える。世界遺産登録の過程で、さらにわが国の近代化・産業化に対する関心が高まり、そのなかで多くの人々が共有できる地域史が生まれてほしいと思う。いつの日か、足尾銅山のとらえ方も〝○と○〟の〝と〟が消えるよう、さらに深化することを期待したい。そのとき、足尾の地域政策も新たな方向へ向かっていると考える。

鉱山都市・足尾を読み取るための着目点

提案書の趣旨に沿って、足尾の景観が何を物語っているかを整理してみる。

―鉱山都市・足尾が表すもの―

・産銅システムの進化を表す都市

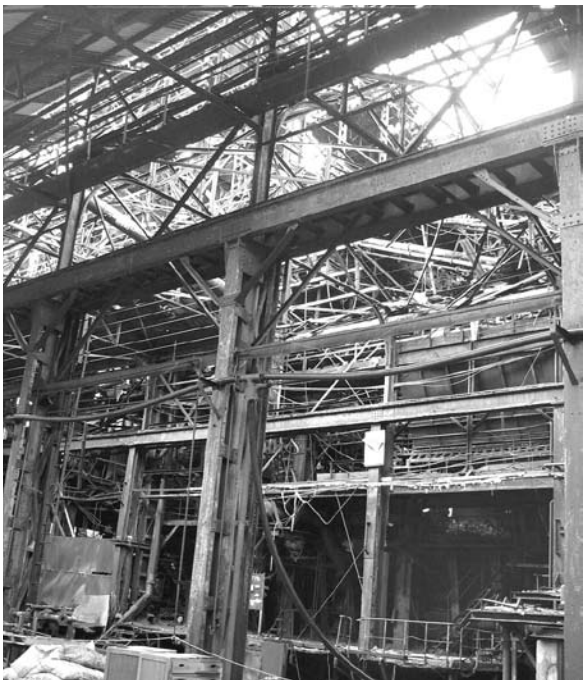
明治以降の産銅システムの急激な変遷は、近世の鉱脈単位の産銅システムを受け継ぎ、エネルギー、交通等の社会基盤と産銅に関する近代技術を導入しながら、拠点の形成とその変遷を通して、全山の坑床を見渡した組織的な産銅システムへの過程としてとらえられる。鉱夫をはじめとする住民の生活も、生産システムの組織化に伴って大きく変化していく。

・鉱山に関わる環境問題に挑戦した都市

産銅システムと廃棄物処理システムは産銅量の調整に関しては競合する関係に

現在も稼働する中才浄水場

ある。しかし、両システムとも各工程ごとに再開発を通して一カ所へ集めて拠点化し、集中投資により高度な技術を適用することで効率的に改善できる。浄水施設や堆積場等の廃棄物処理システムを完備するには多くの投資が必要となるからである。この戦略が古河の環境問題への挑戦の姿を表している。


本山製錬所内部の状況

—着目点—

上記を示す要素として次のものが着目すべき点として挙げられる。

- 拠点の形成とその再開発（本山、小滝、間藤、渡良瀬、宿）
- 排水処理システムの構築と煙害・松木沢への対応
- 生産を支える立体的なインフラ（エネルギー、輸送システム）
- 拠点を単位とした生活空間（地区）
- 生活空間（地区）の構成（飯場、社宅、浴場、学校、倉庫、三養会、病院、町屋、社寺等）

資産の保全・活用

足尾の環境は、潜在的にさまざまな価値を持っている。現在の使われ方から判断すると、それらは次の二つに分けられる。ローカルな価値として、コミュニティとしての価値（生活環境として活用）と鉱工業生産用地としての価値（工業用地としての活用）が挙げられる。急激な過疎化に悩む足尾住民にとり、コミュニティをいかに維持するかは深刻な問題である。次に、国内の広域的価値として、水源地の環境面での価値（植林、治山、治水、自然環境の体験学習の場としての活用）と観光・レクリエーション価値（産業遺産観光、野外レクでの活用）が挙げられる。足尾は

松木渓谷の治山事業

下流域との関係で重苦しい過去を背負ってきた。それを気遣って、足尾の人々は外に対し多くのことを語らないできたように思う。近年、多くのボランティアが松木沢の植林に参加し、自然修復の拠点として注目されている。

今回の提案書において、歴史的遺産としての価値を付与することにより、世界遺産としての価値（学術的価値、文化的景観、学習の場としての活用）が加わる。これらの諸価値を統合して、資産の保全と活用を図ることが求められている。

行政に関しては、各分野（治山、砂防、治水、環境、都市、文化財、地域振興／市、県、国）の諸制度を連携して運用する必要がある。特に、今後日光市を越えた渡良瀬川下流域の扱いについて、栃木県がどのように対応するかが大切な論点となるように思われる。

当然のことながら、多くの遺産が古河の所有する土地にある。規模の大きな遺産が多く、しかも現在使用中の施設も多い。幸い、提案書作成にあたり、未公開の資料提供に始まり、非常に積極的な協力を頂いている。しかし、遺産に関する具体的な保全案を検討する上で解決すべき多くの課題を有しているのも事実である。

地域内外の人々の交流をいかに高めるかが、このプロジェクト全体の目標となると考える。本特集で執筆されている小野崎敏、神山英昭両氏をはじめとして、多くの内外の方々が市民運動を展開してきている。村上安正氏は、ライフワークとして足尾銅山史を手掛けられており、提案書作成においても、多くの知見を教授していただいた。また、インターネットで検索すると私の知らないたくさんの団体が足尾のサイトを持っているのに驚かされる。それぞれが一方ではさらに独自の活動を進めながら、他方で協力もできる体制をぜひ作っていければと期待する次第です。

（ながい　まもる）

特集２

足尾銅山と近代技術

東京大学大学院 人文社会系研究科・文学部准教授
鈴木 淳

足尾銅山ハ、日光ノ西南ニ、アリ。今ヨリ、二百九十余年前ニ、コノ地ノ農夫ノ、ハジメテ、発見シタルモノナリトイフ

これは日露戦争直前の一九〇三年（明治三十六年）十月に初めて発行された国定教科書『高等小学読本 巻一』の「第十三課 足尾銅山」の冒頭である。

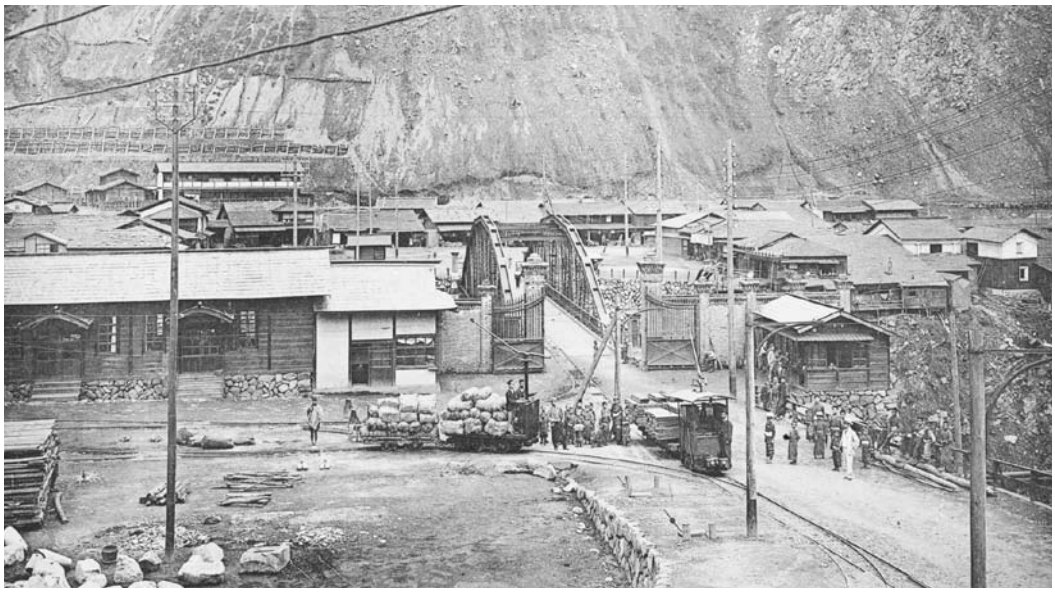
当時の日本はアメリカ、スペイン、メキシコに次ぐ銅の産出国で、銅は輸出品として生糸、綿糸、羽二重、石炭に続く第五位を占めていた。産銅業は教科書に取り上げるべき主要産業であった。足尾の産銅量は一八世紀の初めに年産千五百トン程度と前近代のピークを迎えた後は低迷していたが、一八九一年（明治二十四年）には七千六百十三トンに達して国内第一位の銅山となっていた。この記事は改訂されながら大正時代の五年生用『尋常小学読本』まで引き継がれる。ここでは、足尾の銅が江戸城や日光東照宮の造営に用いられたが、その時代には人手の割に産出量が少なかったことを紹介し、

しかるに、およそ二十年前より、西洋諸国に用ひらるる種類の、便利なる方法、機械などを用ふることとなりたれば、人手のかかることは、にはかにすくなくなり、産するたかは、非常に多くなりて、世界屈指の大銅山となるにいたれり。

と足尾銅山が西洋からの新技術の導入によって発展したことを述べ、さらに電動捲揚機やレール、選鉱や製錬の大規模な設備を具体的に描いていく。

一八九〇年代に鉱毒問題で世を騒がせた足尾銅山は、その後、近代技術を利用した産業発展を象徴する場として広く知られたのである。観光地の日光に近いという立地条件の良さもあって、足尾を見学に訪れる人も多かった。

古河鉱業の創設者古河市兵衛が足尾銅山の経営を引き継いだのは西南戦争の年、一八七七年（明治十年）であった。三年たっても年九十二トンの産銅にとどまっていたが、新技術の導入はすでに着手されていた。それは馬車道の整備である。山中の足尾に食料を運び、粗銅を運び出す運搬手段を、江戸時代の馬の背から、御者が歩いて付き添う荷馬車や牛車に変えるのが最初の技術革新であった。当時の主要なルートは現在のわたらせ渓谷鉄道に沿って群馬県側に出る道で、一八八九年（明治二十二年）に両毛線が開通して大間々駅（現・岩宿駅）が設けられるまでは、現在の太田市内、利根川の古戸河岸まで六十七キロあまりの道程を牛馬車が行き来した。鉱山内への新技術



1890年代　電車と現存する古河橋（小野崎一徳撮影）

導入も運搬からだった。一八八〇年（明治十三年）に二十六歳で坑長となった木村長兵衛が、長年放棄されていた本口坑に簡単なレールを敷設し、トロッコで掘削した土砂を搬出して坑道の再生を図ったのである。

木村の就任から四年、一八八四年（明治十七年）の産銅は二千八百七トンに達した。このころ新設された洋式選鉱場の砕鉱機などの動力用、また製錬所の熔鉱用の吹床への送風用に、初めて水車や蒸気機関が導入された。これによって金づちを使う手作業の砕鉱や、手や足で鞴（ふいご）を動かしての吹床への送風が不要になり、人々が単純労働から解放されるとともに、生産の拡大が可能になった。選鉱場や製錬所は、本口坑とこれらを結ぶ一・六キロ余りのドコビール式軌道で結ばれた。車両は動力のないトロッコであったが、鉱石は上から下に運ばれたので、傾斜部では滑車を用いて下り車両の自重で上りの車両を引き上げた。ドコビール軌道はすでに国内で土木工事に用いられており、他の技術も国内の鉱山・炭坑で活用されていたものである。

当時、鉱山への新技術導入をリードしていたのは工部省であった。一八七〇年（明治三年）に設置された工部省は、多くの雇外国人を招いて鉄道・電信事業や鉱工業を行い、また東京の虎ノ門に工部大学校（東京大学工学部の前身）を設け、日本人学生にスコットランド式の学生服を着せて英語で工学教育を施していた。古河は足尾の経営に着手したころから工部省の鉱山関係者を招聘して助力を得ていたが、工部省の廃止直前の一八八四年から八五年（明治十八年）にかけて、工部省の院内、阿仁両鉱山の払い下げを受け、鑿岩（さくがん）機など最新の機械類や、工部大学校を卒業して現場の経験も積んだ近藤陸三郎をはじめとする技術者を引き継いだ。これにより、工部省の先進的な鉱山技術が足尾に応用された。

第一に進められたのが一八八五年に着手された本口立坑と通洞の開削である。江戸時代には、採掘を請け負った人々が手当た

り次第に小規模な坑道を設け、古河が引き継いだ時点で二百八十もの坑口があったが、それらが排水や通気の限界に達することで銅山が衰退していた。そこで、欧米の鉱山にならって大規模な坑道で全山を通じた運搬・排水の骨組みを作り、計画的に採掘しようとしたのである。本口立坑は本坑口から七百二十メートルほど入った備前楯山の山頂直下から下に向け、通洞は現在も銅山観光に利用されている坑口から水平にそれぞれ掘り進められた。阿仁から転用した鑿岩機で穿孔し、その穴にダイナマイトを詰めて発破する方式で掘進された通洞は、十一年後の一八九六年（明治二十九年）に三キロ近くに達し、四十四本の鉱脈を貫いて他の各坑道と連絡し、全山を通じる近代的な銅山の骨格を形成した。通洞は一九七三年（昭和四十八年）の閉山まで用いられ、当時の計画が適切なものであったことを証明している。

坑内の湧水や立坑の掘削のため排水が課題となった一八八六年（明治十九年）には、阿仁からスペシャルポンプが持ち込まれた。スペシャルポンプは工部省が国産化し、九州の炭鉱開発で活躍した蒸気ポンプである。しかし、地上のボイラーから鉄管で蒸気を導いて坑内深くで蒸気ポンプや立坑用の蒸気捲揚機を使うのは効率が悪かった。一度は坑内にボイラーを設置してみたが、これは煙が上部の坑道に充満して挫折した。そこで、ドイツのジーメンス社の助けを借りて電化を図り、一八九〇年（明治二十三年）に間藤発電所を完成して四〇〇馬力の水車で発電を開始した。富士電機、富士通を生み出す古河とジーメンスのかかわりの起点であり、間藤には現在も水力発電用の鉄管と発電所の下部構造物の一部が残っている。これにより、坑内のポンプと立坑捲揚機が電動機で駆動され、また電灯もともされた。これが十数年で国内の各鉱山に広がった電気利用の起点であり、その後、一八九八年（明治三十一年）に古河が筑豊の下山田炭鉱で電気動力を利用したのが、炭鉱での電動機利用のさきがけである。一八九三年（明治二十六年）ころには電車の運転も開始されたが、国内での電車の前例は一八九〇年の内国勧業博覧会で上野の会場内を走った例だけであった。

産銅が増えると、牛馬車の交通量の多さにより一八八八年（明治二十一年）に大間々警察署が牛車の通行を禁止するなど、道路輸送が限界に達した。折から一八九〇年に日光から今市まで日光鉄道が開業し、今市から日本鉄道線に乗り入れて東京に至ることが可能になったので、日光への運搬ルートが模索されたが、細尾峠が障害となった。そこで、ここに区間長三千七百九十メートルのアメリカ製ハジリー式架空索道が架設された。スキー場のリフトに似た蒸気動力の索道である。架空索道は一八八七年（明治二十年）の佐渡で先例があったが、足尾ではこれに鉱山の命脈を託し、以後、燃料

間藤水力発電所（小野崎一徳撮影）

や坑木用の木材の運搬用などに続々架設したところから、足尾が日本における架空索道の揺籃の地となった。一九〇四年（明治三十七年）には初めて足尾で開発された玉村式で第十二索道が架設され、玉村式をはじめとする索道は各地の鉱山に普及していった。細尾峠を挟んだ道路では馬車鉄道が整備され、一八九三年までには馬車鉄道と索道によって鉱山から日光駅まで結ばれた。鉱山からは粗銅が、外部からは食料や日用品、また東京の砂村で古河が自製したコークスも運ばれ、一九一二年（明治四十五年）の足尾鉄道（現・わたらせ渓谷鉄道）開業まで、足尾銅山への主要物流ルートであった。

細尾峠を越える架空索道（小野崎一徳撮影）

このように、一八八〇年代には工部省の後を追っていた足尾の鉱山技術は、一八九〇年ころから新型の製錬炉の導入、一八九七年（明治三十年）からの坑内での電車運転、一九一四年（大正三年）以降の鑿岩機の開発や製造なども含め国内鉱山の先頭を走り、注目を浴びた。

一方で、一八八五年ころから渡良瀬川下流で鉱害が問題となり、特に一八九〇年と一八九四年（明治二十七年）の洪水によって広範囲の農地が鉱毒被害を受けた。亜硫酸ガスと伐採のため山が荒れて降水時に坑外の廃鉱石類が流されたこと、坑道の整備により長年坑内にたまっていた鉱分を含んだ水が流出したこと、また選鉱の機械化で採取しきれぬ鉱分を含んだ排水が大量に流されたことなど銅山の発展が原因である。田中正造に代表される被害者の運動を受けて、政府は廃鉱石の流出を防ぎ、排水に生石灰を混ぜて沈殿池に導くなどの鉱害防止工事の実施を命じた。期限内に完成しなくては鉱業停止との条件の下で、足尾では一八九七年に大規模な工事が行われた。脱硫機能を持つべき煙突に期待した効果がないなどの技術的限界があったが、これが国内最初の近代的な公害防止工事であり、この面でも足尾が新技術活用の初めての舞台となった。現在も足尾では砂防工事や植林による自然回復の努力が続けられている。

1897 年　鉱害防止工事で造られた本口沢の堰堤
（小野崎一徳撮影）

一昨年、一九四九年（昭和二十四年）以来足尾銅山で働き、労働運動と鉱山技術を中心に足尾の歴史の研究を進められてきた村上安正氏の大著『足尾銅山史』（随想舎）が刊行された。本稿も同書によるところが多く、興味ある方は同書を参照されることをお勧めしたい。

（すずき　じゅん）

特集３

自分史の中の足尾銅山

ＮＰＯ法人　足尾歴史館副理事長
小野崎　敏

はじめに

一八世紀、西ヨーロッパに起こった「産業革命」によって人類が獲得した新しいシステムは、「近代文明」として日本はもとより世界中に伝播し確立した。二一世紀に入るや、その近代文明が自然を破壊。「地球温暖化」問題等の危機事態を迎え、人類と自然が共存する道を模索する時代となった。現在は、京都議定書の施行を受けて、世界各国・全人類が温室効果ガスを削減する共通課題に向けて待ったなしの決断を迫られている。

足尾銅山は、江戸時代から明治期を経て昭和期まで日本近代産業の発展を支えてきたが、創業期から、農業と産業の間（はざま）で多くの課題を抱えながら試行錯誤を繰り返してきた所でもある。

今、先人たちが足跡を残した足尾が、格好の「環境学習」の場となっている。足尾銅山は、一九七三年（昭和四十八年）に閉山し、かつて隆盛を極めた町は過疎化している。足尾町では現在、活力ある地域づくりに取り組んでいる。「産業遺産」と「環境教育」をテーマとした観光振興のために実行委員会を組織化。その受け皿として、町にある観光資源の整備とガイドの養成に努めている。私も外野からそれに協力している。

かつての足尾は、ものづくりの「光を示す」地域としての観光地点であった。現在は、環境保護を目指す時代の中で、鉱害防止遺跡や禿（はげ）山の緑化活動を素材として、産業観光、体験観光へと多様な観光資源の活用ができる地域に生まれ変わった。

私のこと

私は、銅の町・足尾に生まれ、鉱山会社に入社。鉄の町・釜石でサラリーマン生活を終えた鉱山野郎である。それゆえ、自分史の中に鉱山史をとらえて、鉱山・金属・足尾・釜石などのキーワードをベースに学生時代から約半世紀にわたって趣味の世界で古書店を巡り関係資料を収集してきた。

数年前に現役を退き自由な時間ができたので、資料をもとに本をまとめて出版するほか、収集した写真や図絵の公開などをしている。私の少年期は、戦中戦後の足尾銅山の隆盛期で、貧しかったが活力のある時代だった。製錬所から出る煙も気にも留めず、付近の禿山で元気に遊んでいた。小学校は、銅山付属の私立学校で、銅山従業員の子弟とともに、体育館・講堂など、当時としては恵まれた学舎で学んだ。校是は、銅山創業者の古河市兵衛の言「運（うん）・鈍（どん）・根（こん）」だった。私の生家は足尾銅山御用達の写真

館で、祖父や父が足尾の銅山内外を写真として記録していた。家業は現在まで兄が引き継いでいる。私の実家である写真館には、写真の原板が残っていない。現在は、足尾の足跡を語り継ぐために、それらの写真類を古書市場やコレクターから収集する活動を続けている。写真には、過ぎ去った時間がメカニックな記録として保存されている。銅山の坑内や製錬などの現場、森林伐採、水力発電、電車、空中索道、馬車鉄道、それに鉱害防止工事の現場記録など多岐にわたっている。欧米から導入した設備の運転状況や、廃ガスや坑内水処理の鉱害防止について、明治人の現場の処理状況を検証することもできる。これまで収集した中から二百枚あまりを選択し解説を付した写真集を、祖父の名を冠し『小野崎一徳写真帖・足尾銅山』（新樹社）として、一昨年ようやく刊行することができた。これらの記録によって、銅山作業や森林作業の撮影当時の様子を読み取ることができる。

足尾銅山のこと

足尾銅山は東洋一の銅山であった。江戸時代の一七世紀初めから一九七三年に閉山するまで、約四百年にわたって銅量約八十二万トンを生産した。足尾は、江戸時代は鎖国下にあっても幕府直轄銅山として、長崎港から銅が輸出されていた。明治期も日本近代化のための欧米技術導入の主要な資金源として大半が輸出・活用された。その後、銅は電気の時代を導く基幹金属となる。

「黄金の国ジパング」といわれる、一六世紀から一九世紀にかけての日本は、世界の金・銀・銅の最大産出国であった。明治維新後は、欧米から導入された技術と古来から蓄積されてきた固

1887～88年（明治20～21年）ころ　本山・有木坑口前の坑夫たち（小野崎一徳撮影）

有の技術を組み合わせて、日本国内での産業革命を鉱山産業がリードしていた。足尾銅山もその一つである。しかし一方では、燃料や用材としての木材を付近の山林から伐採し、それに加えて製錬ガスが山を荒らし、洪水とともに廃石や廃水が流れて、渡良瀬川下流の農民に被害を与えた。銅の生産量に比例して農作物の被害も増加し、禿山も広がった。公害の原点といわれる所以（ゆえん）でもある。銅山によって上流で松木村、下流で谷中村と二つの村が消えることになった。

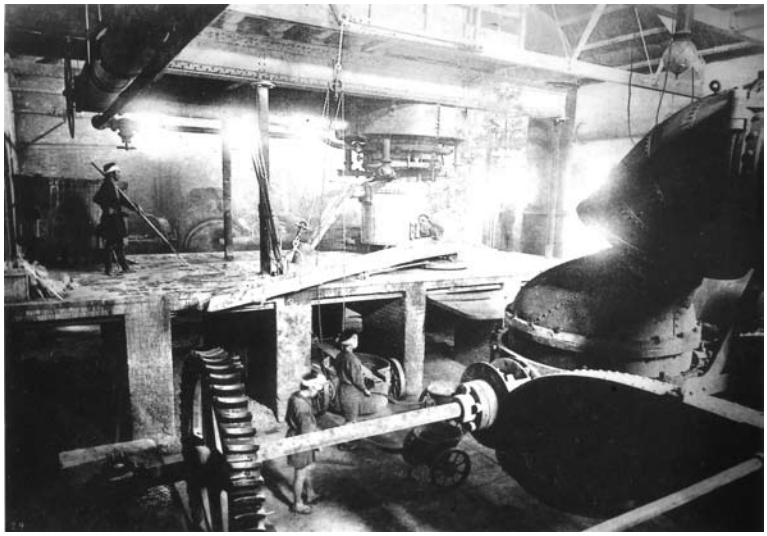
足尾銅山は、政府の殖産政策と富国強兵策のもとで生産主導体制を続けた。ようやく戦後になって無公害自熔製錬所をフィンランド・オートクンプ社の技術をベースに完成するのは民主国家になってからである。無公害技術による銅製錬法が足尾で完成した後は、この方式が世界に拡大し、無公害設備の原点ともなっている。

足尾銅山には、公害の原点といわれる汚名があることは否めない。その鉱害解決のために実施した鉱山側の対応は、被害者側の根強い反対運動の結果としてなされたものであった。当時の政府や企業の対応につき議論が百出しているが、時を経た足跡が現地に残っている。残された山河、堆積場、沈殿池、発電所、製錬所……である。

産業革命の発生以来、製造現場においては、動脈技術を中心に発展し、環境面に配慮した静脈技術はなおざりにされていた。そのため、生産量拡大により公害が発生し、その対策が後追いの状況になっていた。その反省として、自然との共生という視点から、現在の地球温暖化防止への対策重視の時代が幕を開けることになった。足尾銅山の歴史の中で、そのような動脈と静脈の不調和時代を学び取ることができる。

閉山後三十年の時を経ても多くの鉱山施設は遺跡となって足尾の地に残っている。それに加えて歴史の流れを記録した写真・図絵・図面などの資料も整備・保存してあり、足尾歴史館で見学できる。

足尾の地は産業展開の「光と影」の歴史を学習できる格好の場なのである。足尾町では数年前から、全町博物館構想を掲げてその実践に取り組んできたが、ようやく体制が整いつつある。



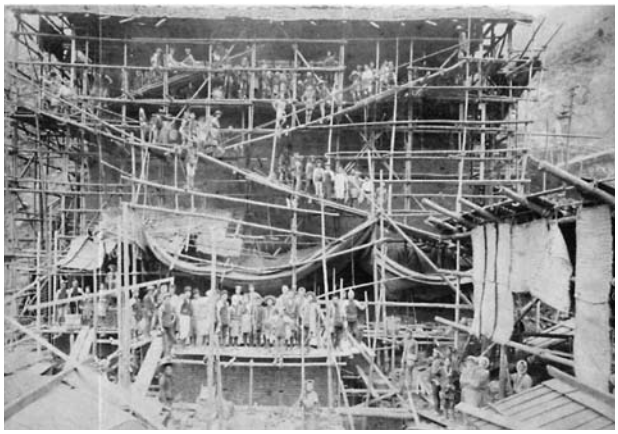
1891～93年（明治24～26年）ころ　直利橋製錬所内部（日本で初めての銅ベッセマー転炉）
（小野崎一徳撮影）

足尾歴史館のこと

足尾銅山の観光施設としては、一九七三年の閉山後に足尾町で設置した「銅山観光」

がある。銅山の通洞坑口を活用して坑内の一部が見学できる。一時期は年間三十万人余の集客もあり盛況であった。往時の勢いを回復する企画が、町の観光経済課が中心となって進められている。

一九九六年（平成八年）に結成された「足尾に緑を育てる会」の活動は、地域興し運動としても定着し、「環境学習」の一環として体験植樹に訪れる学生や一般の人々が多くなっている。それまで足尾町には、残念であるが、博物館など銅山や町の歴史を顕彰する箱物がなかった。二〇〇〇年（平成十二年）に「環境学習センター」が、町営で開設された。環境問題を学べる施設も開設され、現在は「緑を育てる会」に運営が委ねられている。



1897年（明治30年）8月25日　鉱害防止のため築造中の脱硫塔（小野崎一徳撮影）

しかし、観光客のみならず足尾住民の間では、足尾銅山の歴史や文化が学べる場の設置が望まれていた。町の有志たちがボランティアでそれを作ろうという試案ができて、「足尾歴史館」を民力で始めることとなった。箱物としては、休眠中の町営スケート場を借用することが了解され、寄金を集めて改装し、展示品や看板、説明資料等も市民の力で準備した。私自身も町外から参加し、自分で集めていた足尾関係の資料は、すべて提供した。展示棚の準備や写真の複写表装等も自力で協力した。

二〇〇五年（平成十七年）の開館以降、来館者も増えて館の運営も現在はＮＰＯ法人の認可を得て順調に推移している。館の開設に伴い国土交通省・林野庁・県土木事務所などからも緑化・砂防・交通等についての諸資料の提供があり、古河機械金属からも無公害製錬所のミニプラントや保存資料の展示協力があった。さらに銅山のオーナーである古河家ご親族からも未公開の秘蔵遺物が寄託されるなど、展示品は年々増加し充実してきている。

おわりに

この地方に残る神話の中に男体山と赤城山の神が争ったという伝説がある。その戦場が日光の戦場ヶ原であり、中禅寺湖が、勝利した男体山の戦利品であるという。

男体の神の化身が龍（蛇）で赤城のそれは百足（むかで）であるという。蛇は鉄を、百足は銅を物語る呪術信仰がある。この伝説では百足が蛇に負けることになるが、そのことは銅文化が鉄文化に負けたという歴史物語でもある。現実には、男体山に鉄があり赤城山に銅があったかが謎である。男体山には鉄を産した遺跡等があるが赤城山地域には銅山遺跡がないのである。私は、赤城の銅は足尾の銅であり、神話の時代につながっているものと思っている。そう考えると、神代から現代まで、文明を切り開いた「銅」の町・足尾は、二一世紀の新しい環境という視点から見ても「観光資源」となり得る。

（おのざき　さとし）

特集４

足尾銅山緑化の歩み――取り組みの歴史、現状と展望

ＮＰＯ法人　足尾に緑を育てる会　会長
神山　英昭

はじめに

昨年（二〇〇七年）二月、地球温暖化に関する世界の研究者らで作る「気候変動に関する政府間パネル（ＩＰＣＣ）」は、今世紀末の地球の平均気温は六・四度の上昇が予測される、など第四次評価報告書を公表した。これを受けて、七月には主要国（Ｇ８）首脳会議がドイツで開催され、地球温暖化防止対策について協議された。

さらに、十二月にインドネシアのバリ島で「気候変動枠組条約締結国会議（ＣＯＰ13）」が開催され、二〇一三年以降の地球温暖化対策（ポスト京都）が協議され、合意書が公表された。

昨年は以上のごとく世界の国々が地球環境の問題に真剣に取り組んだことから、環境元年とも言われている。

わが国においては、今年の七月に北海道で洞爺湖サミットの開催が予定され、その議長国として、積極的な地球温暖化対策が求められることになる。

さかのぼれば、世界の賢人の集まりであるローマクラブが、急速に進む天然資源の涸渇化、公害による環境汚染の進行、発展途上国における爆発的な人口増加、軍事技術の進歩による大規模な破壊力の脅威などによる人類の危機に直面していることに鑑み、一九七二年に「成長の限界」というレポートを公表した。このことは人々に大きな衝撃を与えた。これに呼応するかのように、同七二年に国連がスウェーデンのストックホルムで「国連人間環境会議」を開催したことから、地球の環境問題が世界の関心事となった。

一八世紀後半、イギリスに端を発した産業革命によって大量生産、大量消費、大量廃棄の時代を迎え、人々の生活は豊かになってきた。しかし、その半面、知らず知らずのうちに、生きとし生けるものの大地とも言うべき「地球環境」を汚染し続けてきた。近年の異常気象現象は、長い間傷め続けられてきた地球の、人間に対する怒りの現象かもしれない。経済優先社会において相当な対処をしなければ、地球環境は悪化するばかりだ。すなわち、人類の生存にもかかわる大問題だ。

このような時代に地球温暖化防止にかかわる「森林づくり活動」は、有意義な活動であると認識し、私たちの活動は始まりました。

活動内容

足尾町（現・日光市）は、一九七三年（昭

和四十八年）の足尾銅山の閉山によって急激な人口減少に見舞われ、過疎・高齢社会を迎えています。

このように過疎化が進行するなかで、一九九三年（平成五年）十一月、失われゆく足尾町や足尾銅山に関する文献等を収集し、公開する施設を造ることを目的として「わたらせ川協会」を設立しました。この会の基本方針で次のように述べています。

日本の銅山が産出した「銅」が、日本の近代化と産業の発展に大きく貢献してきたが、同時に発生した公害も見落とすことのできない事実である。

近年、地球環境の問題が大きな社会問題となっている。国連は一九七二年「国連人間環境会議」を開催し、環境問題を国際的に取り上げた。そして、二十年後の一九九二年六月、ブラジルで「環境と開発に関する国連会議」（地球サミット）を開催し、環境保全と経済発展の調和を求めて「持続可能な開発」で締めくくった。地球が病み、試練の時代を迎えている。

これら地球的規模の問題を抱えるなか、足尾銅山が生み出した「光と影」の部分や「銅」が運ばれた道筋に生まれた地域文化、さらには国内鉱山の歴史等々、渡良瀬川流域及び日本の社会経済文化に影響を及ぼした関係文献等の資料を収集し、公開する施設を足尾町に建設し、管理運営していくと共に、文芸作品や文藝活動を顕彰し、もって文化の振興に貢献することを基本方針とする。

歴史は過去の芸文に非ず 現代の警策にして　未来の指針なり

関係文献等の資料を収集し、公開する施設を足尾町に建設することは、時代の要請でもあり、その施設を地球環境の保全と経済発展の問題を国際的視野で学び考える「拠点」としたい。

併せて、収集した文献等資料及び資料館を足尾町の財産として未来永劫引継ぎ、足尾町の振興に貢献することとしたい。

小さな町から世界のASHIOへ

このように「足尾に緑を育てる会」の活動が始まる以前から、環境問題を意識的に取り上げています。

さらに、「わたらせ川協会」の活動を続けていくなかで、一九九五年（平成七年）六月、第三回総会の際、「大畑沢緑の砂防ゾーン」（建設省管理地）に桜の苗木十本植えましたが、しばらくすると見事に枯れてしまいました。これはまずい、と判断し、足尾の樹林形成に明るい宇都宮大学農学部教授の谷本丈夫先生を迎えて現状を見ていただきました。そこで先生いわく「桜の木を植えて花見がしたいのか、それともこのように荒れ果てた景観を見て何か感じないか」と諭され、改めて荒涼たる山容を見つめ直し、これまで全く交流のなかった渡良瀬川の上流および下流の市民グループ五団体が呼び

2002年4月　春の植樹デー　大畑沢緑の砂防ゾーン全景

掛け、集い、一九九六年（平成八年）五月、最初の植樹活動を始めました。以来、毎年四月には「植樹デー」、七月には「草刈りデー」、八月には「足尾グリーンフォーラム」、十一月には「秋の観察デー」を定例的に実施しています。さらに、二〇〇二年（平成十四年）からは特定非営利活動法人として新たなスタートを歩み始めました。

最初の植樹デーでは、百六十人が集い、百本の苗木を植えましたが、年々参加者も植える苗木も増え、二〇〇七年（平成十九年）の第十二回植樹デーまでで延べ八千三百六十人が参加し、三万五千三百本の苗木を植えました。植樹する苗木は、コナラ、ミズナラ、ケヤキ、ガマズミ、カエデ等々、広葉落葉樹や実のなる木など二十五種類です。

草創期に植えた木は身の丈をはるかに越え、四～五メートルにも成長し、しかも、植樹した所だけが紅葉し、さらには、小鳥のさえずりが聞こえてくる景観を眺めると、感慨深いものがあります。このような風景があちこちで目につくようなるといいなぁ、いつの日にかと、こんな風景を夢見ながら活動しています。

植樹デー実施状況

	日　程	植樹本数	参加人数	場　所
第1回	1996年5月	100	160	大畑沢緑の砂防ゾーン
第2回	1997年4月	1,500	600	国有林地内
第3回	1998年4月	600	350	大畑沢緑の砂防ゾーン
第4回	1999年4月	1,500	300	大畑沢緑の砂防ゾーン
第5回	2000年4月	3,700	450	大畑沢緑の砂防ゾーン
第6回	2001年4月	3,000	600	大畑沢緑の砂防ゾーン
第7回	2002年4月	3,300	650	大畑沢緑の砂防ゾーン
第8回	2003年4月	4,000	700	大畑沢緑の砂防ゾーン
第9回	2004年4月	4,000	800	大畑沢緑の砂防ゾーン
第10回	2005年4月	4,500	1,100	大畑沢緑の砂防ゾーン
第11回	2006年4月	4,500	1,300	大畑沢緑の砂防ゾーン
第12回	2007年4月	4,600	1,350	上桐久保沢（栃木県）施工地
	合　計	35,300本	8,360人	

「大畑沢緑の砂防ゾーン」は国土交通省管理地
出典：足尾に緑を育てる会

二〇〇二年からは、国土交通省より「体験植樹支援業務」の業務委託を受け、関東一円から訪れる小学生を対象に年間六十～七十団体の植樹活動に対処しています。

私たちのモットーは**「足尾の山に百万本の木を植えよう」**です。

体制づくり

当該地は、足尾銅山の煙害によって二千五百ヘクタールもの山々の樹木が枯死し、無惨な光景をさらしています。荒廃裸地化した山々の植生復活事業が百年以上も前から実施され、今ではその半分程度が回復しているといわれていますが、いまだに荒涼たる風景を残しています。

一九五六年（昭和三十一年）足尾銅山の製錬設備が改良され、亜硫酸ガスを排出しない装置が設置されてから、国や栃木県によって本格的に治山・治水・砂防工事が実施されてきました。これまで長い間いわゆる公共事業として行われてきましたが、一九九六年からは民間活動として動き始めました。

2004年4月　植樹デーの風景　右奥に足尾ダムが見える

私たちの活動は、荒廃地のどこにでも植えられるというものではなく、急な斜面で土砂などが流れ落ちないように国、栃木県が山腹に土留めなどの山腹基礎工事を施した場所に民間の手で植樹しています。いわゆる官民協働の緑化事業を進めています。この事業はいつ果てるとも知れない気の長い活動です。官と民の協調が不可欠です。

実践する組織が、安定し充実した活動ができる体制を築いていけるかが求められています。その一つの方策が、二〇〇二年に制定された「自然再生法」の活用です。足尾地区の場合は、その前提条件が比較的整えられています。日光市管内に国土交通省（渡良瀬川河川事務所足尾砂防出張所）、林野庁（日光森林管理署）、環境省（北関東地区自然保護事務所）、栃木県（林務部日光治山事務所）、土地所有者古河機械金属㈱があり、その上、組織的・継続的に活動する民間団体（足尾に緑を育てる会）が存在しているので、自然再生推進法に基づく体制が整っています。今後はこの組織を有効に活用して、足尾での植樹活動が停滞しないよう努めていく所存です。

2005年夏　大畑沢緑の砂防ゾーン　これまで植えた木が成育し植樹地全体に緑がよみがえってきた風景

将来の計画および展望

私たちの活動は、次の世代、そしてまた次の世代へと何世代にもわたって続けていかなければ達成できない超長期的、壮大な事業です。

国や地方の関係機関および、老若男女を問わずなど多くの世代の人々の協力が不可欠です。特に、これから社会に貢献する若い人々（小・中学生など）の理解と協力が必要です。

当会の対応として、これら多くの人々が参加できる条件整備が欠かせません。

このことから、今後は次の事業を展開し、目的達成に努めていきます。

①国・県・土地所有者の協力を得て、植樹作業地の確保に努める。
②対応スタッフの確保に努め、組織の充実に努める。
③町外から気軽に参加できるよう「森の学び舎」設置に努める。
④自然再生推進法に基づき、推進協議会の設置に努める。
⑤緑化活動を通じて、日光市の活性化に努める。
⑥日光地区森林整備ボランティア協会を設立する。
⑦見て、学んで、体験できる足尾ならではの環境学習体制を確立する。
⑧指定管理者制度に基づく「足尾環境学習センター」の利用拡充に努める。
⑨会員拡充を図り、健全財政に努める。
⑩足尾を訪れる来訪者の便宜に寄与するため松木方面のガイドに努める。

これらの事業を実践して、自然再生、地球温暖化防止、地域振興等に寄与し、社会貢献活動団体として、さらなる飛躍に努めていきます。

（かみやま　ひであき）

ブータンに学ぶ観光開発の哲学
――GNHとツーリズムの関係性についての一考察

北海道大学観光学高等研究センター　准教授
山村　高淑

はじめに

我々、北海道大学観光学高等研究センターは、二〇〇六年度より財団法人日本交通公社の特定研究プロジェクト「コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する調査研究」に共同研究の形で参画させていただいている。コミュニティー自身が自律的にツーリズムをコントロールし、自らの社会・文化の発展につなげていくための方策を、国内外の先進事例から探っていこうというものである。

さて二〇〇七年十一月二十四日から十二月四日にわたり、この研究の一環として、ブータン王国での実地調査を行った。その目的は、「GNH（Gross National Happiness：国民総幸福量）とツーリズムとの関係性」について、調査団員各自の専門分野の視点から考察することであった。本稿では筆者の専門分野であるヘリテージツーリズム（文化遺産観光）の観点に偏ることをお断りしつつ、このブータン調査で得られた知見の一部を報告したい。

GNH（国民総幸福量）とツーリズム

GNHは一九七六年、当時二十一歳だった第四代ブータン国王により提唱された、社会経済開発のための概念である。一九九九年、当時の首相であったロンポ・ジクメ・ティンレ氏はGNHを構成する四つの柱を明らかにした。すなわち、①健全な経済成長と開発、②環境の保全と持続可能な利用、③文化遺産の保護と振興、④良き統治、の四つである。では、こうしたGNHの考え方とツーリズムとの関係性はどのようなものなのか。

今回、幸運にも我々調査団はこのジクメ・ティンレ元首相に直接お会いしてお話を伺う機会を得た。我々の問いに対する元首相の回答は極めて明快だった。元首相によれば、ブータンの観光政策におけるGNHの意味は、上述した四つの柱のうち、④良き統治によって、観光をその他三つの柱の実現に貢献させていくことにあるという。すなわち、

㈠ツーリズムを雇用の創出、地域の経済発展に役立てること
㈡ツーリズムを自然環境の保全に役立てること
㈢ツーリズムを文化遺産の保全に役立てること

である。

そしてそのために「クオリティー・ツーリズム」の推進が重要であるという。「ハイ・クオリティー、ロー・ボリューム（ロー・インパクト）」という原理原則に従って観光開発を行うべきだというのである。

つまりこういうことである。㈠の経済発展のためには観光収入増を目指すべきである。しかし㈡や㈢の、自然環境や文化遺産の保全のため

には、観光客数が地域のキャパシティーを超えないようにすべきである。ではどうするか。量より質を目指すのである。自然や文化について十分な理解と敬意を示し、かつ高い客単価で滞在する旅行者に来てもらおう、というのである。

ジクメ氏によれば、こうした理念を実行に移す際に重要なことは、まずは自らが提供するサービスの質を向上させ、その結果として質の高い旅行者に来てもらう、という順序であるとのこと。そして最終目標は「ハイ・クオリティー・デスティネーション（質の高い目的地）」としてブータンの国際的地位を確立することにあるという。

「高い質」を実現するためには、国民が環境と文化に対して、より高度な教育を受け、敏感になり、敬意を持つようにならなければならない。その根幹を成すものが「センス・オブ・プライド（自尊心）」である、とジクメ氏は繰り返し強調する。「自尊心」―我々日本人が忘れて久しい言葉である。

ブータンのヘリテージツーリズムの持つ意味

このようなブータンの観光開発哲学は、外交面でも極めて重要な意味を持つ。なぜなら、中国とインドという超大国に挟まれた小国ブータンが国際社会にアピールできるものは、軍事力でも経済力でもなく、豊かな自然とユニークな文化でしかないからだ。特にブータンの政策のあらゆる面で「ユニークな文化」は強調される。独自の文化こそが「自分が何者であるかの定義」なのであり「自尊心」の源である。そしてこれこそが、国家が独立の体を保っていくための根幹となる。このような意味でブータンにおいては文化遺産の保護、さらにはそれを活用したヘリテージツーリズムのあり方は特別な意味を持っているのである。

こうした姿勢は、むやみやたらに世界遺産を登録しないという態度にも表れている。目下、ブータンは世界遺産登録物件を一つも持たない。しかし内務文化省文化局の建築遺産保護担当者によれば、登録申請については決して急がないし、また無理にする必要もないという。担当者は言う。世界遺産に登録する方法を考えるより、建築遺産をそのまま使い続ける手法を考えることのほうが大切なのだ、と。

ブータンの建築遺産の特徴は、寺院やチョルテン（仏塔）、ゾン（寺院と地方行政府としての機能を併せ持つ複合建築）や民家に代表されるように、昔ながらの用途で使われ続けている点にある。そのため世界遺産に登録するとなると、さまざまな制約が出てくる。一言で言えば、保護建築になってしまい修改築がままならなくなると、使い続ける上で困ることが多いのだ。

世界遺産に代表される建築遺産の保護に関する国際的な議論はあくまでも西洋的価値観主導の論理であり、決してブータンの文化にそのまま適用できるものではない。また木造建築は絶えざるメンテナンスが必要で、木造文化としての保存の枠組みと理論が必要である。したがって、もちろん世論の一部には世界文化遺産に登録したい、という議論はあるものの、目下、じっくり今後のあり方を検討しているのだという。そう、自らの頭で、自文化の価値について

伝統的な民族衣装「キラ」を身にまとうトンサ県職員。公務員の制服は男女ともに民族衣装である／トンサ県にて
筆者撮影

考えているのだ。世界遺産制度に価値判断を委ねてしまわない。これこそが「自尊心」である。

まさにこうした態度こそがブータンの文化遺産を、そしてヘリテージツーリズムを極めて魅力的なものにしているのである。我々旅行者は、ブータンのどこへ行っても、生きた建築遺産に触れることができる。そして旅行者自身があたかも巡礼の旅をしているかのような感覚にとらわれる。常に細やかに手入れされた建物には歴史の連続性があり、住民の生活にあふれ、真剣な祈りの姿がある。

一つ具体的な例を挙げよう。ブムタン県にクジェラカンという、王族ゆかりの寺院がある。建造年代の異なる巨大な三棟の建物が並ぶ寺院である（それぞれの建造年代は、一六五二年、一九〇〇年、一九九〇年）。この寺院を前にして、誰もが驚くことは、これら歴史的に建造年代の異なる三つの建物が、まったく違和感なく、その時代差を感じさせずに堂々たる存在感を示していることである。これこそがまさに使われ続けている証拠であり、生きた建物としての圧倒的な存在感である。

では一体「幸福」とは何なのか

ブータンの旅は、町や村の美しさは決して建築の様式美からなるものではない、ということを教えてくれる。真の美しさとはそうした建築や景観を創り出している生活の美しさにほかならないのだ。では美しい暮らしとは何だろう。それはきっと人の心・精神の美しさに帰結するのだと思う。寺院で無心に祈る人々を見て、我々は心や精神の美しさの根底に信仰の力があることに気づく。ブータンでのそれは「仏の教え」である。

仏典に「因縁生起」という言葉がある。「縁起」の語源で、世界の一切は直接的にも間接的にも何らかの形でそれぞれかかわり合っており消滅変化している、という考え方である。ブータン研究センターのカルマ・ウラ氏によれば、この考え方が「幸福」を理解するうえで非常に重要であるという。つまり、幸福は相互に与える関係であり、相互信頼に基づく有意義な関係性を持つことにある、というのである。

さて、冒頭で述べた、観光の質を上げることで、結果として質の高い観光客に来てもらうというクオリティー・ツーリズムの考え方における質とは何であろうか。実は「幸せ」こそが「質」なのではないか。つまり、因縁生起の考え方に照らし、こう考えてはどうだろうか。地域住民は旅行者の幸福に貢献できるよう振る舞う。そして旅行者は地域住民の幸福を実現するための助けとなるよう行動する。地域住民と旅行者は

クジェラカン。向かって右の棟が 1900 年、左の棟が 1990 年の建造である／ブムタン県にて　筆者撮影

ブータンの旅は巡礼である。至る所にダルシン（経文旗）がはためく。旗布には経文が印刷されており、風に乗って仏の教えが広まるのだという／ヨトン・ラにて　筆者撮影

相互に幸せを与え合うことができるのだ。こうした相互信頼の関係を観光の現場において構築していくことこそが、ブータンのＧＮＨの概念に基づく観光開発なのではないか。

しかし、事はそう簡単ではない。なぜなら、「幸せ」とは各人それぞれで異なる価値を持つからだ。つまり、多様な価値観の存在が担保されて初めて「幸せ」は成立するのだ。今後、ブータンにおいても各人の価値観はますます多様化するであろう。そうしたときに、果たして仏教的価値観はそれを束ねる求心力を依然として持ち続けることができるであろうか。

ブータンの現在から我々が学ぶことは多い。しかしＧＮＨの考え方自体がいまだ答えの出ていない大いなる社会実験であることも確かである。また政治的にも君主制から本格的な議会制民主主義への移行の途上にある（今年二〇〇八年、新たに国会を開会し、立憲君主制に移行する予定）。ブータン国民は自らどのような「幸せ」の答えを出すのであろうか。今後の推移を見守りたい。

ブータンから学ぶこと～おわりに代えて

ブータンの観光は決して「ハレの観光」ではない。あくまでもローカルな生活そのものが主体であり、宗教や信仰の現在そのものを目の前に提示する。これは、もはや見る旅ではなく感じる旅である。こうした「生活文化を感じる旅」こそコミュニティー・ベースド・ツーリズムのあるべき姿であり、それを成立させるためのヒントがブータンにはある。

もちろん、ブータンの良い面ばかりを取り上げて美化することは本稿の目的とするところではない。当然のことながらブータンもさまざまな社会問題を抱えている。紙幅の都合上、こうした点については別の機会に譲るが、しかしいずれにせよ、ブータンが我々日本人に多くの示唆を与えてくれる事例であることには間違いない。大国の狭間で小国はどう生き延びていけばよいのか。ユニークな伝統文化をどのように継承していったらよいのか。わが国にも共通する課題ではないか。

観光開発について言えば、ブータンの事例は、開発にはそれを支える哲学が必要不可欠であることを示している。今後、我々日本人はその哲学を一体どこに求めたらよいのか？ 果たしてビジット・ジャパン・キャンペーンで一千万人来日すればわが国民は幸せになれるのか？ これは高度経済成長を支えた数の理論とどこが違うのか？ そう考えると現行の観光立国の議論が極めて表層的であることに気づく。

我々日本人は「幸せ」について、いま一度しっかり考えるべきである。ブータンから学ぶことはまさにこの一点に集約される。生き方や幸せそのものについて、我々の風土に即して指針を与えてくれる哲学が、我々の歴史と文化の中にきっとあるはずである。自文化としっかり向き合い、過去の歴史をひもといていけば、答えはおのずと分かってくるのではないか。二一世紀とはそういう時代なのである。

（やまむら　たかよし）

トンサ・ゾン（トンサ県庁舎）で伝統舞踊の練習をする地域住民。ゾンは地方行政と宗教施設の複合建築でその中庭は地域の広場としての役割も担う／トンサ県にて　筆者撮影

連載Ⅰ
あの町この町
第26回

大漁満足――鳥取県・琴浦町

ドイツ文学者・エッセイスト
池内 紀
（イラスト＝著者）

小泉八雲に『日本海に沿うて』と題したエッセイがある。明治二十四年（一八九一）の執筆。

「きょうは七月の十五日。――自分は伯耆の国にきている」（平井呈一訳）

そんな書き出し。前年四月に来日して松江中学の英語教師になった。以来一年あまり、日本への興味が深まっていたころだろう。夏の休暇を利用して旅行を思い立った。タイトルから鳥取県の海沿いを東へ向かったことがわかるのだ。

「この一週間というもの、空には雲の影ひとつない。それなのに、海は連日いよいよ荒れ狂っている」

この七月は旧暦であって、十三、十四、十五日、盆の三日間は毎年こんなふうに荒れるという。十六日に精霊舟を流してしまうと、漁船は一艘も沖へ出ず、漁師はみな家に閉じこもっている。盆の十六日は精霊たちが波路をわたり冥土へ帰る。

「それで盆の十六日の海のことを『仏海（ほとけうみ）』という」

「この夜は凪いでいようと荒れていようと、海上一面が虚空にのぼっていく亡者たちの陰火でチラチラ光る。そしてなんとも聞きわけがたい『精霊たちの話し声』が波の間から聞こえてくる」

土地の人から聞いたスタイルで述べているが、たぶんに八雲の想像が入っているようだ。西欧の読者に「神秘の国ジャパン」を伝える意図があったので、神秘性を強調する書き方になっている。

土地の名が入っていないのは、場所をかぎりたくなかったからではあるまいか。だから少しあとのくだりでも、それがどこかはしるされていない。

「……灰色の墓地が突如として現われてきた」

驚くほど大きな墓地だったそうで、「人力車夫が全速力で駆けて、十五分はたっぷりかかった」。

多少の誇張が入っているのだろう。しかし、はじめてエッセイを読んだとき以来、よく覚えていた。八雲の描写からして、左手が海、右手が墓地。米子から鳥取にかけての海沿いである。

「林立する無数の石塔……あまりにも長い歳月をそこで過したため、砂丘から吹きつける砂でボロ〳〵に欠けくずれて、碑面の文字などまったく消え失せてしまっている」

鳥取市で講演をたのまれたのを機会に小旅行を考えていた。仕事を終えたあと、世話をやいてくれた女性に何げなく八雲の話をすると、その人は言下にいった。

「そんな墓地がありますよ」

とても大きく、墓の数は二万をこえる。「花見潟墓地」といって、小泉八雲が書いているのは、きっとその墓地だろう――。

翌日、電車で西に向かった。八雲とは方向が反対だが「日本海に沿うて」行くことは変わりがない。倉吉を過ぎると由良、浦安。港におなじみの駅名になった。やがて赤碕。あとで知ったが、通常の「崎」ではなく「碕」の字をあてるのは、歴史に即してのこと。

花見潟墓地の赤碕塔

三角屋根の駅舎の正面わきに「赤碕駅開業一〇〇周年記念」の碑が見えた。明治三十六年（一九〇三）八月の開業。「鉄道赤碕ＯＢ会」が建てた。現在は嘱託とおぼしい人がいるだけだが、かつては、何人もの制服姿が忙しく立ちはたらいていたのだろう。

駅前から道が二手に分かれている。一つは旧の家並みに入り、もう一つは新道で、まっすぐ海へ下っていく。

「平成の大合併」に際して、赤碕町は東隣りの東伯町と合併して琴浦町になった。旧町はどちらも、海側を一辺として内陸に長くのびた三角形をしていた。三角が二つ合わさり、より大きな三角になった。人口約二万人。

新道沿いの旧赤碕町役場は、いまや琴浦町役場分庁舎である。

警察署や消防署なども「分庁」とひとしい格下げがされるらしく、どことなく沈んだ感じで、人のけはいがしない。

海岸近くを国道九号線が走っている。地図には松江からの山陰自動車道が太い線で示してあって、米子を過ぎたところでプツリととぎれ、琴浦町の辺りは点線になっている。それが倉吉の北で復活してミミズのようにのび、浜村の手前でまたとぎれる。ミミズと点線の背後から、目下大問題の道路予算がのぞいている。

こちらはヒマなので、しばらく国道に佇み車の流れをながめていた。四車線の立派な道路であって、ごく順調に流れている。こみ合っているけはいはみじんもない。これと平行して、どうしてもう一本自動車道路が必要なのかシロウトは首をひねるばかりだ。もう一つ国道沿いに旧道がのびていて、こちらはほとんど車が走ってすらいないのである。

その旧道に入ってすぐのところだった。家並みの切れ目に海が見え、手前に異様なものが顔を出した。それはまさしく「異様なもの」だった。広大な広場に群衆がつめかけたのとそっくり。見渡すかぎり頭部だけがひしめき合って、それ自体が巨大なかたまりになっている。あらためて目をやると、すべてが石の頭で、笠状、半円状、角状とさまざま。ところどころに卒塔婆が槍のようなトンガリをつくっている。

石段を下りると、まさしく「群衆」の中に入っていく。ただここは人間の場合とちがい、声がなく、息がなく、動きがなく、体温がない。冷やかな石また石。右も左も、前も後も、おびただしい石また石。てんでんばらばらな配置だが、いつしかそれ自体の秩序をおびて、列とも群れともつかぬものをつくっている。その中を人ひとりがやっとの通路が迷路のようにのびている。

ふつう墓地は宗派なり寺なりに付属しているが、花見潟墓地は自然発生的に生まれた。もっとも古い墓は中世にさかのぼる。あるとき、誰かがこの土地を選んで墓を建てた。以後、宗派、また神仏を問わず死者が出ると、ここに墓をつくりはじめた。総数はたしかに二万基をこえる。現在は「赤碕財産区」が管理しており、おりにつけ無縁墓を一ヵ所に集めて場をあける。だから墓の数はいまもなおふえつづけている。

なるほど、ロケーションがいい。海沿いの丘陵がここだけガクンと落ちて、運動場をいくつも合わせたような平地になっている。すぐ前が海。補陀落信仰が盛んだった中世には、観音浄土を海のかなたに見た。死者を葬るのに絶好の位置である。

ほぼ中央に並外れて立派な二つの石塔がある。宝篋印塔と宝塔を合わせたような独特の様式をもち、ともに三メートルをこえる。鎌倉時代末期のものとされ、昭和の初めに美術史家・川勝政太郎が鑑定して「赤碕塔」と命名した。すでに鎌倉のころ巨大墓地の様相を呈していて、豪族といわれる者が寄進したのではあるまいか。

花見潟墓地の真南に船上山という特異な形の山がある。大山の旧期カルデラ外輪山の一つで、地質学では「安山岩メサ状台地」とよばれている。三方が屏風のような崖をつくり、その中に台地がひろがっている。

その形状とともに歴史上のエピソードでも知られている。鎌倉末期のこと、隠岐に流されていた後醍醐天皇が島を脱出して当地に上陸。土地の豪族・名和長年が船上山を本拠にして天皇を守り、幕府軍を撃破した。地元の利で地形をよく知っており、それを戦略に利用したわけだ。

海にもっとも近い一角に「赤碕殿」と彫りこんだ大きな石碑がある。北条方の将としてやってきて、戦いの終わったのち、鎌倉に帰らず当地に住みついた。地名の「あ

かざき」を姓にして、その際、赤崎ではなく赤碕の文字を用いた。石碑は文政三年（一八二〇）に当時の番所役人が願主となって建てたものという。そんなゆかりから町が明治半ばに町制をしいたとき赤碕町とした。当用漢字といった不粋なものがハバをきかす前のことである。

関東武士はどうして国に帰らなかったのか。もしかすると最初の墓は、郷里を捨てた人だったのかもしれない。かつての戦場の真北にあたり、補陀落浄土を望む一点にある。

「おりから盂蘭盆のこととて、この墓地にも、新しい石塔の前には、ま新しい白い盆燈籠が下がっている」

小泉八雲は夜の風景を想像した。墓地いちめんに、あかあかと灯がともっている。そのなかに燈籠の下がっていない墓があって、家が絶えたか、子孫が土地を去ったのか、「時すらも今はさだかでないような――そんな遠い遠い昔の人たち」。

すぐ東が赤碕の港で、墓地入口に四メートルをこす大きなお地蔵が立っている。江戸後期に道者が寄進をつのって建てたという。「河原地蔵尊」というのは、すぐわきの川が、以前はこの辺りまで河原としてひろがっていたせいだろう。

その川の名前が「化粧川」。港が「菊港」。どちらにもそれぞれ由来がある。赤碕は漁師町である一方で、鳥取藩の藩米の積み出し港だった。港近くに藩倉が並び、回船問屋が軒をつらねていた。北前船が入ってくると、いっそうの活気をみせた。そんな日常のなかから化粧川や菊港の由来が美しくつくられていったのではなかろうか。

現在はもの静かな町である。花見潟墓地を見下すところに旧道がのびてい

菊港（赤碕港）

る。ガラス戸に餅屋、糀屋の金文字の入った店。ガランとしているが、品物や材料が並べられていて、いまも営業中。古風な家並みのなかを、宅配の車だけが現在を告げるようにして走っていく。

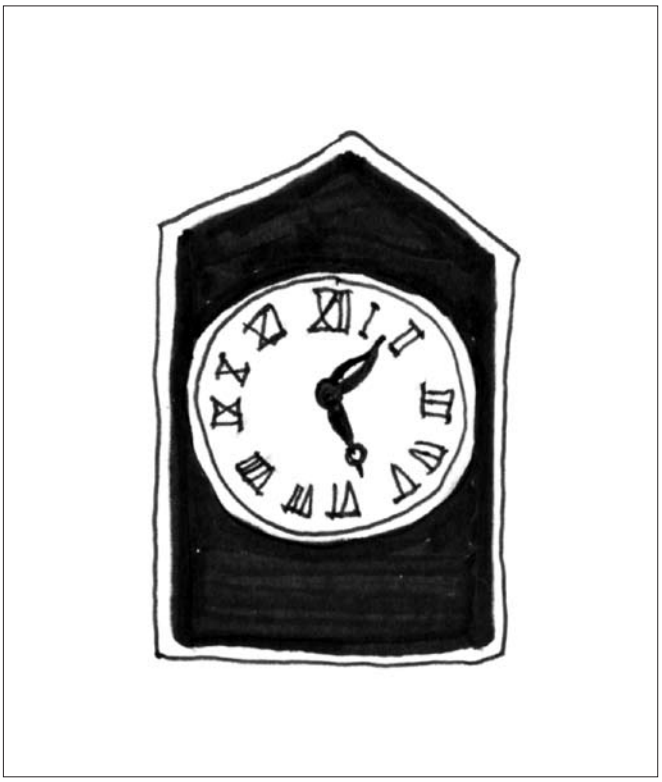
船上山へ向かう南には田んぼがひろがっている。光地区といって、美しい集落がある。黒い瓦屋根に白い壁、どっしりとしたつくりで、まるで大地から生い出たぐあいだ。

壁のコテ絵が美しい。土蔵や妻壁、あるいは白壁づくりの蔵の扉にレリーフにして彩色されている。ゆたかな米が家づくりにあたり、たのしい遊びを誘いかけたのだろう。普請の仕上げに左官たちが腕を振った。絵柄は縁起のいいのにかぎる。鶴がスックと首をのばしたり、亀が白壁を歩いている。袋に紐がついているのは巾着であって、どんどん銭が舞い込むようにと袋の口があけてある。

旧道にもどって海沿いを東に行くと、突堤の先端の台座に、白い石の三角と四角の組み合わせたのが立っていた。前衛彫刻家の作で、名づけて「波しぐれ三度笠」。そういえば笠をかぶり、カッパ姿の流れ者が波打ちぎわに佇んでいるようでもある。この場合は補陀落浄土ではなく、不義理をして捨ててきた故里や妻子のことかもしれない。異形のものだが、なぜか風景にぴったり収まっている。

赤碕港の西に後醍醐天皇御船着所の碑や、上陸した天皇が腰掛けたという岩がある。海流がこの辺りに流れつくように巡っているのだろう。朝鮮や大陸からの漂着人もいたと思われる。イナバの白うさぎは波をとびそこねてサメに襲われた。日本海に波づたいの道のあったことを伝えている。

赤碕の一つ東が八橋、そして浦安。新町をつくるにあたり、東伯町のほうが面積、人口とも大きかったので、浦安の東伯町役場がそのまま新しい役場になった。浦安は市場町としてひらけたところで、その点でも好都合だ。



ただ旧東伯町と旧赤碕町のあいだには、船上山からつづく台地が、かなりの高さをもったままつづいている。浦安の市場が栄えたのは、あきらかに東にひろがる倉吉とのつながりであって、台地の向こうの赤碕ではない。山陰自動車道の点線は船上山の台地をぶち切り浦安の東で海沿いの国道に合わさる形になっている。もしそれが開通すると、旧道沿いの地区は、海沿いの奇妙

な残存物のように置いてきぼりをくうのではなかろうか。

糀屋のとなりの食料雑貨の店で、アンパンを買って牛乳一本とでおひるにした。店のおばあさんによると、今はひとけないが、お盆には「ようけ人がやってくる」そうだ。夏の三日間は墓参りの人がたえない。土地の古くからの習わしが残っていて、一日目には麻がらを焼やして墓を浄める。そのとき唱える文句もある。迎え団子といって、この日は白いお餅をそなえる。

「二日目はあんころね」

あんの入った餅。三日目は朝に赤飯、夕方に白い餅をそなえる。これは送り団子という。餅屋さんが健在なのは、そのような風習があるからだ。

「もうスケのうなりました」

おばあさんはひとりごとのように呟いた。風習は現実よりも、おばあさんの記憶の中にあるのかもしれない。

小泉八雲はそんな風習のことではなく、盆の十六日に海岸の小さな村々から流される精霊舟のことを聞いたようだ。

「このへんの海岸一帯は、ほかの土地に比べて、ずいぶん手のこんだ、金のかかった精霊舟をこしらえる」

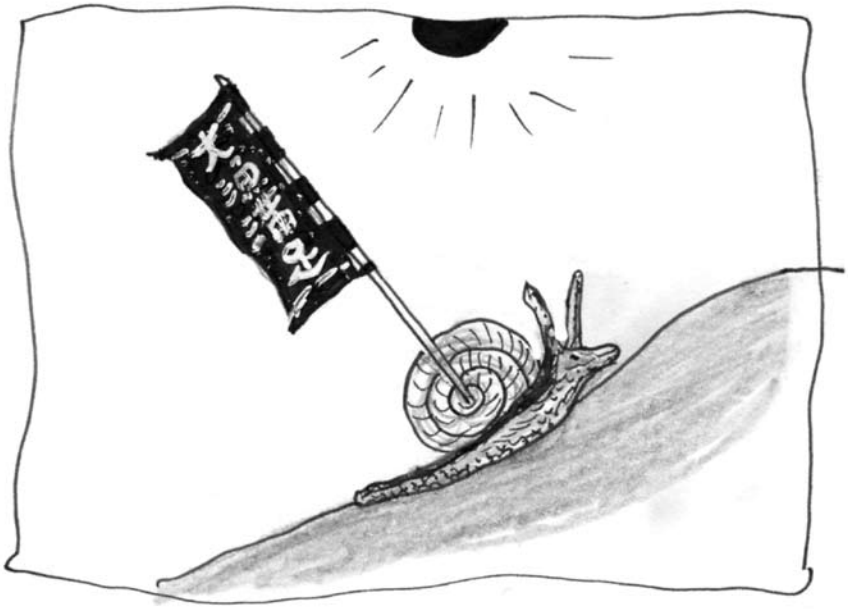
骨組の木のわくが器用な舟の樽型になっていて、白い紙の帆に死者の戒名を書き、舟べりには卍を書いた紙の小旗がひるがえっている。流し方、流す時刻は村ごとにちがっていて、ところによっては舟に小さな燈籠をのせることもある。

高いところから海を見たくなって、おばあさんにたずねると、町の氏神さまを教えられた。家並みの背後に祀られていて、立派な石段をのぼっていく。

高台でたえず海風をあびているせいだろう、山門も本殿も神さびた白にそまり、いかにも「聖域」の雰囲気をもっている。目の下に黒瓦の屋根がうねっていた。いくつもの扉をもった重厚な白壁は、昔の藩倉の名ごりなのか。海は青黒く、突堤のまわりにレースのような白波が寄せていた。

石畳にそってズラリと旗が並び、まっ赤な地に「大漁満足」と白く染め抜いてある。おりからの風にあおられ、ハタハタと音をたててなびいた。誰が名づけたのか、豊漁にこたえて「大漁満足」、古今の名コピーにちがいない。

（いけうち　おさむ）



連載Ⅱ
明治のジャパノロジスト
F．ブリンクリーの
「美しい国ニッポン」⑤

英国に認めさせた初の国際結婚

旅行ジャーナリスト
沢木　泰昭

外国人旅客受け入れ事始めともいうべき喜賓会（The Welcome Society of Japan）創始メンバーのひとりに南貞助という実業家がいます。喜賓会会長の蜂須賀茂韶や幹事長の渋沢栄一に向かってインバウンド事業の必要性を熱っぽく説いた人です。一九〇二年（明治三十五年）には同会の名誉書記を辞して、自ら外国人専門の旅行案内会社「漫遊用達所南商会」を設立します。

日本は一夫多妻!?

喜賓会をめぐって南貞助は、同じ創始者仲間のフランシス・ブリンクリー（評議員）とは顔見知りであったと思われます。このふたりには共通項があります。ともに国際結婚第一号だったことです。

南貞助はロンドン滞在中に見初めたライザ・ピットマンと一八七三年（明治六年）六月に結婚。これが日本で国際結婚を法制化した「太政官布告第一〇三号」の適用第一号とされています（小山騰著『国際結婚第一号』）。

ところが、太政官布告第一〇三号は、サッカーやラグビーのローカルルールのようなもの。条約国の英国、フランスなどは自国の基準を満たしていない、と異論を唱えました。

問題点は、夫婦同一国籍が前提になっていたこと。妻が夫の国籍に移籍するよう規定されました。南貞助と結婚するライザは英国籍を離れなければなりません。こうした事例に英国は国際結婚とは認め難いと反論します。

また、「日本は一夫多妻」と誤解されるような慣例がありました。妾や身請けの風習です。貧困救済の手立てとしても日本では容認されていたものの、条約国は首をかしげる因習です。プッチーニのオペラ『蝶々夫人』もこうした風土を背景に成りたっています。

英国公使ハリー・パークスが「私的契約であって結婚ではない」と、日本の国際結婚を法的に認めなかったのには、こんな社会情勢もありました。

媒酌人は伊藤博文

ブリンクリーは一八七八年（明治十一年）九月に田中安子（八十子より改名）と結婚します。安子は水戸藩士の娘で、当時では数少ないキリスト教徒です。

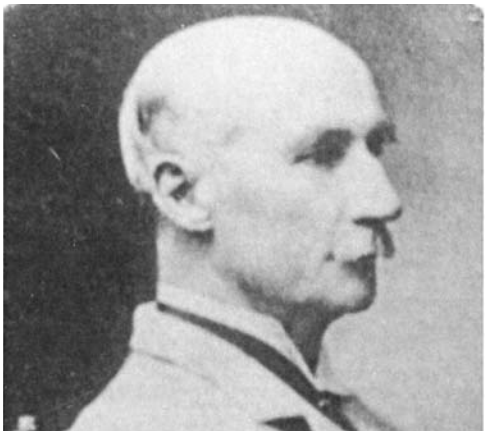
英国公使館員から二度のお雇い外国人として教壇に立ったあと、彼は工部大学校の数学教師に任命されます。英字紙『ジャパン・メイル』執筆に関心を高めるなど、日本暮らしに根を張りつめたころです。

来日して十二年目。安子との結婚は日本永住の決心を加速させることになります。

安子の兄・田中直方が工部大学校で教師のブリンクリーに出会い、卒業後はジャパ

ン・メイルに就職。この師弟関係が安子と結びつけるきっかけともみられます。媒酌人は伊藤博文といわれています。

でも、この結婚も日本のローカルルールによるもの。母国・英国は国際結婚と認めません。安子との結婚を「私的契約」として認めない英国法務総裁に対して彼は憤り、巨費をなげうって一八八六年（明治十九年）、「英国法でも有効な国際結婚」と訴訟を起こします。大論争のもと、四年後の一八九〇年（明治二十三年）二月、ようやく安子との結婚が「一夫一妻制に基づくもの」と解釈され、英国で正式に認められます。日本国内法で結婚してから十二年目のことです。


フランシス・ブリンクリー

英国法でも認められた初の国際結婚です。ダルマの両目があきました。安子は国際結婚で初めて英国籍を取得した日本女性ということになります。三人の実子も英国籍を取得します。これを機にブリンクリーの親友ジョサイア・コンドル（建築家）、ジョン・ミルン（地震学者）、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）などの親日家が次々と正式結婚を実現することになります。

〝サロン・ド・ブリンクリー〟

安子と結婚し、ブリンクリーは東京・広尾に私邸を設けました。現・有栖川公園の近く、九千坪の日本庭園の中に洋館を築きます。ブリンクリー邸はコンドルをはじめ、温泉の効力を説いた医師E. ベルツなど内外の文化人や政・財界人のサロンになります。

「ブリンクリー夫人は優しい魅惑的な婦人で英語は理解できたが言葉はほんの少しか話せなかった。庭園は実に美しい眺めで鮮やかな赤いツツジが土手の斜面に咲き乱れていた。屋内で舞踏の催しがあったが、一面に咲いている花を眺めているほうがずっと楽しかった」（エリアノーラ・メアリー・ダヌタン著『ベルギー公使夫人の明治日記』）。

私的な余談になりますが、安子は家人の大叔母に当たります。それで、数年前にブリンクリーの出身地アイルランドの学び舎のトリニティ・カレッジ（ダブリン大学）を見物にゆきました。翌日にはなんとブリンクリー家の子孫が目の前に現れました。子孫探しをしたわけではありません。ふとした一言が端を発した、奇跡ともいえる邂逅でした。先方もフランシス・ブリンクリーの足跡をトレースしていることが分かり、家人は安子よろしく、慣れぬ英語で情報交換を続けています。

ブリンクリーの妻・安子

最近の便りでは、長女ヒギンズの孫たちがアムステルダムに集合したとありました。日本に行って戻ってこなかった曾祖父について、あれこれと語りあったことでしょう。

［以下次号］

（さわき　やすあき）

連載Ⅲ
ホスピタリティの
手触り47

成熟の国へ

旅行作家
山口 由美

スキー場は日本の眠れる財産

このごろの日本は、一昔前の、まだユーロなどという強い通貨が誕生する以前のヨーロッパに重なり合うところがあるように思えてならない。当時、ヨーロッパの通貨に比べて円は圧倒的に強くて、日本人は、少なからず世界のすべてが円で買えてしまうような錯覚に陥っていた。あのころのパリやローマやロンドンが、中国人富裕層であふれる今の銀座や秋葉原に重なり合うのだ。

百貨店の朝礼で中国語の練習をしている様子をニュースで見ながら、私は、パリの百貨店の「日本人専用カウンター」に思いを至らせる。パリの百貨店には、EU以外の外国人向けに税金払い戻しの書類を整えてくれるカウンターがあるが、多くの百貨店では、日本人向けのそれが独立している。日本人が強い円で盛大に買い物をした時代に設けられたのだろう。長いことあまり不思議にも思わなかったが、最近、その他向けカウンターに列をなすロシア人や中国人を見るにつけ、遠からぬ未来に形勢は逆転するに違いないと思うようになった。

そう、日本は、右肩上がりの経済力を背景にたくさん物を買う国から、そういう人たちを受け入れる側の国になろうとしているのではないだろうか。

かつてのヨーロッパで見た光景が重なり合うのは、都会ばかりではない。このごろの日本のスキー場にも私はそれを感じる。

日本のスキーブームの頂点は、一九八七年に公開された映画『私をスキーに連れてって』のヒットからバブル崩壊までだろうか。そのころ、スキー場は人であふれかえり、週末ともなればリフト待ちで長蛇の列ができた。それが今では、週末でもリフト待ちなど、ほとんどなくなってしまった。

スキーブーム全盛のころ、混雑と無縁のゆったりとしたスキーは、海外スキーの専売特許だった。スイスアルプスやカナディアンロッキーは、さぞかし雪質やコースが桁違いに上質なのだろうと思って出かけてみると、そうしたものは、案外、日本と大して差はなくて、もちろん森林限界を超えた山に広がる氷河の雄大さには息を飲んだけれど、何よりもゲレンデがすいていることにばかり感動したように記憶している。

それを思うと、今の日本のゲレンデは、まるでスイスアルプスである。

そして、滑っている人たちの姿も、いつ

しかヨーロッパのスキー場に近くなっている。家族連れや高齢者の増加である。

『私をスキーに連れてって』のころ、ゲレンデを埋め尽くしたスキーヤーは、圧倒的に若い世代だった。あれから二十年余り、スキー人口は、新しい世代の取り込みが少ないまま、ずるずると平均年齢が上がってしまった感がある。スキーに代わって台頭したスノーボードも、スキーヤーとボーダーとのゲレンデのすみ分けなどを口やかましく論議した時期を過ぎて、今では当たり前のように共存している。スノースポーツの人口自体が減っているのだから、うるさいことを言っている場合ではないのだろう。そして、そのスノーボードさえ、最近では平均年齢が上がって、若い人のスポーツという感じが希薄になってきたように思う。

スキーブームが去った日本のスキー場

かつてヨーロッパのゲレンデで、ゆったりと休日を楽しむ老夫婦の姿に、成熟した国の豊かさを見たものだが、それは、まさしく今の日本なのではないか。シニア割引のリフト券を身につけて元気に滑降する男女は多い。

しかもバブル経済を経た日本のスキー場は、インフラが実によく整備されている。高速リフトやゴンドラによる十分すぎるほどの機動力、レストランやスキーセンターには、ウォシュレットの付いたトイレが、これまた十分すぎるほど用意されている。スキーブームの初まりとなった『私をスキーに連れてって』のころは、こうしたインフラは、まだ追いついていなかった。それが整備されたとともにバブルが崩壊、ブームは去ってしまった。皮肉なものである。

成熟した国においては、ヨーロッパ諸国がそうであるように、歴史によって蓄積された財産を生かして観光立国の道を歩むのがいい。今の日本が、まさにそうではないか。

スキーといえば、北海道のニセコにオーストラリア人が押し寄せるようになって久しい。不動産投資もする彼らによって、ニセコでは地価が高騰しているという。そして今、次なるターゲットとして、長野県の白馬に注目が集まっているらしい。そう、過去三度のオリンピックのうち、札幌、長野と二度までが冬季大会だった日本は、実は、ウインタースポーツの国なのだ。

第二のニセコ、第二の白馬は、国内にいくらもある。良質の雪、ゲレンデへのアクセスの良さ、高い機動力など、多くの長所のある日本のスキー場は、欧米のスキー場に比べても遜色はないと思う。これらは、今後、オーストラリア人ばかりでなく、より多くの国の人たちに売り込める、成熟した日本の眠れる財産ではないだろうか。

（やまぐち　ゆみ）

旅の図書館

新着図書紹介

二〇〇八年は北京五輪開催の年。経済成長著しい中国での初の開催となるため、世界中から大きな注目を集めている。二〇一〇年には、上海万博も開催される予定で、しばらく中国から目が離せない状況だ。日本国内では最近、中国で製造していた冷凍食品から毒物が検出されマスコミを賑わしている。なにかと北京五輪の話題が多く露出される時期だけに、こうした事件は非常に残念でならない。

一方、ここ数年の中国への日本人旅行者は急増し、今や海外旅行の人気デスティネーションの一つに成長している。一度ならず何度も足を運んだ旅行者も少なくないだろう。ただ、旅行者の中で、中国の歴史・文化を知った上で旅行している人たちがどの程度いるのか。大半の旅行者は、名所旧跡の観光や名物料理を食べて帰るだけで、中国の魅力を十分味わうことなく帰国するケースが多いのではないだろうか。

より充実した北京観光を実現するために中国と日本の両作家が書き下ろした本が、**『じっくり北京・もっと北京―中華万華鏡・古都の故事伝説（屈明昌、高橋通子共著、元就出版社）』**。著者は「北京の観光スポットの一物一石やそれぞれの名物料理には、由来に関する面白いエピソードが残っており、知られざる文化と歴史が多い……」と指摘する。もし、事前に中国の観光スポットにまつわる歴史上の真実や伝説、さらにそれに関連する文化について知っていれば、旅の楽しさが倍増することを提案している。

本書は、「紫禁城の面白いところ」「皇苑故事」「万里長城の話」「名食の由来」の四章で構成。第一章の「皇帝の私生活」の項では、馬嵬坡に建てられ、千二百年以上の歳月を経た今でも残る楊貴妃の墓の話が出てくる。「昔の墓は、かまくらの形にこんもりと土を積み上げたものだったが、年月の流れで次第に高さが減り、肉まんのようにペシャンコになってしまった……」。雨で土が流出したことが原因の一つだが、甲子園に出場する高校球児が土を袋に入れて持ち帰るように、楊貴妃の墓参りの若い女性たちが墓上の土を袋に詰めて持ち帰ったのが最大の原因だったという。その土を水で溶いて顔に塗ると、楊貴妃のようにきれいになれると彼女たちは信じたという話は面白い。本書には、こうした観光地のエピソードが数多く出てくる。読み進むうちに、「旅行前に知っておけば、もっと魅力的な旅行を楽しむことができたのでは」という思いに至るだろう。著者は、「古い歴史を持つ北京は、名所旧跡だけでなく、名物の食べ物も多く、さまざまな名物料理の由来を知った上で味わうと食文化の歴史を食べているような気分になるだろう」と記している。由来を通じて、その土地の料理の楽しみ方も広がってくるわけだ。

本書の見どころは、観光客が訪れる観光名所や北京名物などにまつわる故事伝説が数多くまとめられている点だけではない。科挙、宮廷生活、飲食習慣、風水禁忌など、それぞれの名物・名所と関連した中国文化にも触れ、中国文化に関心を持つ人たちにも十分楽しめる編集内容にしてある点も特筆しておきたい。

日本人の海外旅行市場が成熟化してきたといわれている。だが、我々日本人は、まだ真の旅行の楽しみ方を体得しているとは言えない。今後の旅行を有意義で充実したものにするためにも、ぜひ一読してほしい一冊である。

（江口哲夫）

四六判　264ページ
定価　1,890円
元就出版社

財団法人　日本交通公社　出版物のご案内

■**定期刊行物**

●**旅行年報**（年更新、毎年九月発行）
過去一年間の旅行に関する動向と展望をデータ中心に解説。

●**旅行の見通し**（年更新、毎年一月発行）
今年一年間の国内旅行・海外旅行などの量的見通しと質的変化。

●**旅行者動向**（年更新、毎年七月発行）
国内・海外旅行者の意識と行動について実施する当財団「旅行者動向調査」の分析結果をビジュアルに解説。「二〇〇七」では、「いまどき若者の旅行マーケット」『旅行大好き』を探る」を特集。

●**観光文化**（年六回、奇数月二十日発行）
旅や観光の文化に関する当財団の機関紙。

●**Market Insight（日本人海外旅行市場の動向）**
（年更新、毎年七月発行）
日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。〇六年より発行。

■**観光読本（二〇〇四年六月発行）**
東洋経済新報社の読本シリーズ。一九九四年の初版刊行から十年を経て、内容を大きく見直した改訂版。観光全般に関する客観データや現象を解説。またそれらに基づく分析・提言など。

■**その他刊行物**

●**美しき日本**
日本の美しい観光資源を紹介する写真集。わが国を代表して世界にアピールでき、わが国の基調となる観光資源三百九十一件を選定し、写真と解説文で紹介。外国語版（英語・中国語・韓国語）"Beautiful Japan"も発行。

●**産業観光への取り組み（二〇〇七年十月発行）**
新しいツーリズムとして注目を浴びる産業観光。その振興に向けた取り組み方を、国内外の豊富な事例とともに紹介。

※刊行物に関する問い合わせ、冊子をお求めになりたい方は
財団法人日本交通公社　観光文化事業部まで。
電話：03・5208・4704　http://www.jtb.or.jp

次号予告

●豊かで穏やかな自然を持ち、歴史と文化に育まれてきた瀬戸内海。次号特集では、「瀬戸内海の風土と文化復興」と題し、瀬戸内海再生への取り組みを紹介します。

調査研究だより

●旅行市場全体が縮小傾向にあるなかで、「観光地が何もしなくても（観光客が）来てくれる」という時代はとうに終わりを告げ、「観光客に来てもらうための最大限の努力」をしなければならなくなっています。

●伊勢志摩や世界遺産「熊野古道」を有する三重県は、観光構造の改革を目指して二〇〇四年度「観光振興プラン」と「誘客戦略」を策定しました。後者は官民協働で効率的・効果的に観光客を誘致することを目的としていますが、行政がこうした戦略を策定するのはほとんど前例がないと思われ、観光振興に取り組む三重県の意気込みを感じます。三重県では、この「誘客戦略」に基づいて二〇〇五年度以降、民間との連携のもとさまざまな誘客事業を展開しており、徐々にその効果も出始めています。

●当財団は、三重県の観光振興プランと誘客戦略の策定、そして二〇〇五年度から継続して首都圏情報発信事業のお手伝いをしています。行政と民間をつなぐコーディネーターとして、当財団は今後も誘客戦略の策定やその後の事業展開について支援していきます。

（朝倉）

編集後記

◆昨年の十一月三日文化の日に「世田谷線とせたがやを良くする会・世田谷線植樹応援団」が主催した「足尾荒廃地における体験植樹」に参加。足尾での植樹体験は新聞記事などで知ってはおりましたが、軽い気持ちで出かけました。「足尾歴史館」でオリエンテーションを受け見学開始。ご案内役を務められた方が小野崎さん。熱意にあふれるその巧みなご説明と生の「足尾銅山」に触れて目を見張るばかりです。禿山、砂防ダムにより堆積した流失土砂で埋まる大地、旧製錬所などの遺構が独特の景観となって無言で語りかけてきます。足尾銅山の近代以降の凝縮された痕跡が眼前に広がります。足尾銅山は公害の原点であると同時に公害と闘った歴史の証人でもあります。二一世紀は環境の世紀です。足尾はまさに「環境の聖地」として新たな役割を発揮しようとしています。

◆神山会長をはじめ「足尾に緑を育てる会」のメンバーにサポートを頂き植樹体験もしました。足尾は夏目漱石の小説『坑夫』の舞台となったのをはじめ多くの文人墨客が足跡を残しています。小野崎さんの著書『足尾銅山物語』（新樹社刊）に詳しく紹介されています。足尾の歴史に関心を持っていただき、一人でも多くの方々に足尾を訪ねていただきたいとお勧めする次第です。

◆足尾はその価値を世界に発信するために世界遺産登録の道を手探りで歩き始めました。今後の動きが注目されます。（宇八）

観光文化　第188号

第32巻2号通巻第188号

発行日 2008年3月20日

●

発行所：財団法人　日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第1鉄鋼ビル
〒100-0005　☎03-5208-4701
http://www.jtb.or.jp

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第2鉄鋼ビル　旅の図書館内
〒100-0005　☎03-3214-6051
http://www.jtb.or.jp/library/

編集人：外川宇八

発行人：新倉武一

●

印刷所：ＪＴＢ印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554